

# PHJ NEWSLETTER

ピープルズ・ホープ・ジャパン  
ニュースレター

## CONTENTS

### 国内事業

東日本大震災・熊本地震支援  
アイロボットジャパンが「ルンバ」を  
61病院へ寄贈

### 支援企業訪問レポート

株式会社八神製作所  
医療は万国共通。

### 国際保健のとびら

「SDGsの中で注目されるUHCって何ですか？」  
今号の先生：  
SDGs 市民社会ネットワーク専務理事 稲場雅紀

### 海外事業

## “UHC”のためにできること

カンボジア：行政と住民が一体となってUHCの実現へ  
ミャンマー：1人残らずサービスを受けられる地域へ

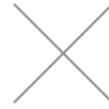




Cambodia



Myanmar



Japan

## “UHC”のためにできること

SDGsのゴール3「すべての人に健康と福祉を」の核となるUHC(ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ)とは、「全ての人々が適切な予防、治療、リハビリ等の保健医療サービスを、支払い可能な費用で受けられる状態」を指します。UHCの実現には経済的な問題だけでなく、物理的や社会的な障害をとりのぞき、保健サービスにアクセスしやすくする仕組みが不可欠。アクセスの改善という観点からPHJの活動を紹介します。

### カンボジア

#### 地域行政と地域住民が手を取り合ってUHCの実現へ

カンボジアの現行事業では地域医療を管理監督する保健行政区とその管理下で地域医療を担う保健センターを支援し母子保健サービスの充実を目指しています。

事業開始当初、私たちが支援している保健センターは様々な理由から、施設が地域にあるものの地域住民にあまり利用されていない状態でした。保健センターは24時間体制で運営すると保健省は定めています。実際にはスタッフの出勤がまばら、週末はスタッフ不在で連絡



保健センター運営委員および保健ボランティア会議の様子

不可、例えばスタッフがいても物品や薬品の不足や十分な知識スキルがないために必要な治療やケアを提供できないなど、保健センターの健全な運営のためには課題が山積でした。そのような状態を目にした村人からの悪い噂は瞬く間に広がり、また村人自身も病気の予防や妊娠出産に関する知識を持っていないために、保健センターからますます足が遠のくばかりでした。

私たちは事業活動の中で、村人への保健教育を支援し、助産師たちにトレーニングや継続教育の場を提供し、保健センターにおける母子保健サービスの向上を図り、会議開催や保健行政区と協力してモニタリングを続けることで保健センターの健全な運営を整えるためのサポートを行ってきました。現在、分娩数や健診数の増加という顕著な変化が現れています。事業開始から順調に好ましい変化が起きるわけではありません。一つの会議、トレーニング、保健教育を行うためには関わる一人一人と対話し賛同してもらい、更に一緒に活動を継続する必要があります。継続的に活動を行う中で得た、小さな積み重ねがやっとなりとして形になり始めたところです。その結果、村人たちは保健センターの変化に気付き、保健センターとそのサービス、そしてスタッフを信頼するようになりました。PHJの支援地では地域行政

### VOICE

#### コミュニティの声



地道な活動から信頼が深まりサービス利用増へ

保健行政区長 Dr. Yim Navy

PHJの支援強化対象の3保健センターについては、保健行政区としても管理体制を整える中で様々な変化が起きました。保健センターのサービスの質が向上し、保健センターの運営を健全化することで、現在は村の人々が保健センターに対しポジティブなイメージを持って利用していることが、保健行政区による昨年の調査からわかっています。PHJが支援しながら保健行政区とともに行ってきた施設改修、会議の定期開催、トレーニングやモニタリングの実施といった活動が実を結び、保健センタースタッフのスキルや知識の向上、働く姿勢の変化、保健センターを24時間利用可能な状態にする、など地域医療の要として必要不可欠な要素が保健センターに備わりました。このような保健センターの改善を知り、村人も保健センターを信頼した結果、サービス利用の増加につながっているのだと思います。

### ミャンマー

#### 村の妊婦さんが一人残らず適切な母子保健サービスを受けられる地域へ

PHJは2014年8月より首都ネピドーから車で約一時間のタツコン郡で母子が安全な環境で適切なケアを受けられることを目標に母子保健改善事業を行っています。

タツコン郡では妊娠可能年齢の女性が約6万人いますが、その中には妊娠後に妊婦健診を受けることを知らない人もいれば、助産師の存在さえも知らない人もいます。

PHJは「母子保健サービス」が妊婦さんに届いているか、使える状態で存在するのか、妊婦さんから受け入れられているかといった観点から①医療施設整備や必須医療器具の供与②母子保健サービスの担い手の助産師・補助助産師のトレーニング③妊婦さんたちがサービスを受ける動機付けとなる母子保健教育の開催④サービスを適切な時期に受けられるように、妊婦さんと助産師の橋渡し役となるボランティアの育成⑤事業後の活動継続を目指した政府職員との連携といったことを実施しています。

母子保健教育を受けたお母さんたち



村で母子保健教育を受けるお母さんたち

らは以前知らなかったことを知る機会になった、妊娠中の生活の過ごし方や産後の家族計画の重要性がわかったなど前向きな言葉が聞かれています。今後もタツコン郡保健局や村人と協力し、全てのお母さんと赤ちゃんが健康に過ごせる地域を目指していきます。

《PHJミャンマー事務所  
プログラムマネジャー 志田保子》

### VOICE

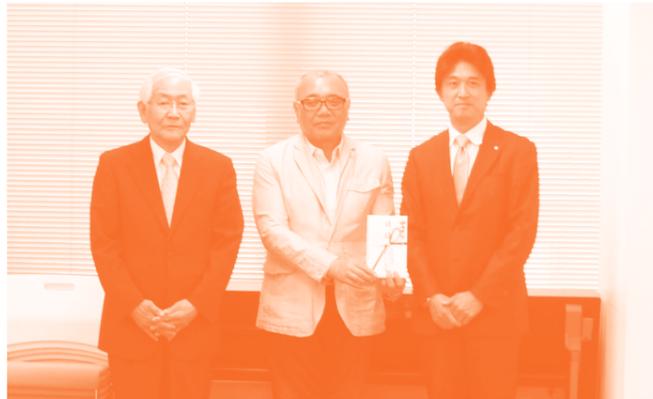
#### コミュニティの声



トレーニングがお産の現場で役に立った瞬間

ラバンサブセンター 助産師 (経験一年) メイウーさん

私は数日前に自宅出産で産後出血のケースに遭遇しました。初産婦さんで陣痛が弱かったのですが、無事に赤ちゃんは産まれてきました。それから10分後に胎盤が出てきました。すると突然出血が起きました。他の人たちは怖くなって逃げてしまいました。私は子宮底のマッサージをし、子宮収縮剤をいれた点滴もしましたが、出血が止まらないので、子宮の中に手をいれて圧迫止血をしました。2時間くらい子宮の中に手をいれていました。すると出血は止まりました。この地域は病院からも2時間ほど離れており、搬送をするにも道が悪いため時間がかかります。このような緊急事態に遭遇したのは今回が初めてでしたが、PHJの助産師トレーニングで習ったことを覚えていたので対応できました。



右よりアイロボットジャパン 梶野社長、全日本病院協会 猪口会長、PHJ 小田理事長

アイロボットジャパン合同会社（以下アイロボットジャパン）は今年4月、ロボット掃除機「ルンバ」170台（12,580,000円相当）をPHJを通して東日本大震

アイロボットジャパンが「ルンバ」170台を61病院へ寄贈

東日本大震災・熊本地震

被災地の病院への支援



病院に寄贈されたロボット掃除機

災・熊本地震被災地の全日本病院協会の61会員病院へ寄贈しました。今回の寄贈についてアイロボットジャパンの代表執行役員社長の梶野元氏にお話を伺いました。

被災地へロボット掃除機を寄贈された想いをお聞かせいただけますか。

Empower people to do more. とのこと

アイロボット社のミッションには、ロボット技術を通して人々に豊かな生活をしてもらいたいという願いがあります。被災地ではまだ生活が元に戻っていないという状況の中で、院内で働く皆さんは掃除はロボットにまかせて、病院であれば患者さんと話をしたり、休憩をしたり、自分の時間を持つてもらいたいと考えました。

事故直後の福島第一原発内をアイロボット社のロボットが調査したと伺いました。

2011年に東日本大震災によって原発の事故が起きた時に、アイロボットCEOのコーリン・アングル自らが内部調査用に自社のロボット Packbot を使ってほしいと申し出ました。

Packbot は発電所内の測定や撮影を行い、人が立ち入れないエリアの状況を把握するなど活躍したと聞いています。そのような経緯があり、アイロボット社の日本人として設立されたアイロボットジャパンとしても、被災地において立てることを考えていました。

今後の社会貢献活動についてのお

考えをお聞かせください。  
アメリカ本社では、STEM教育（エンジニアや科学者の育成プログラム）に力を入れており、アイロボット社の社員が学校に出向き、ルンバにプログラミングをしてルンバを動かそうといった取り組みをしています。日本でも同様に「未来のロボット科学者を育てよう」というテーマで、子供向けの活動を始めようと考えています。

復興支援活動の再調査

2017年7月からPHJは気仙沼や石巻、多賀城での活動経験をもとに、復興が遅れている福島県南相馬市で、震災後に原発事故による放射能の影響で深刻な不安を抱えている子供たちやお年寄りへのサポートを行っている団体との連携支援を開始しました。しかし、この団体に関連する報道を受け、PHJは基本的な信頼関係が崩れたことから連携支援は困難であると判断し、活動を中止しました。現在、活動再開に向け、東日本大震災被災地にて慎重に再調査を進めています。



SDGsの中で注目されるUHCって何ですか？

今号の先生：SDGs 市民社会ネットワーク専務理事 稲場雅紀

横浜の日雇労働者の街・寿町での医療相談活動を皮切りに、LGBTの人権やエイズ問題などに関わる。2002年より(特活)アフリカ日本協議会の国際保健ディレクターとして保健分野の政策提言などに取り組む。2009年よりMDGs達成のためのネットワーク「動く→動かす」事務局局長、2017年より「SDGs市民社会ネットワーク」専務理事。



2015年に国連で採択された持続可能な開発目標SDGs。「ゴール3すべての人に健康と福祉を」の中で核となるUHC（ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ）について、SDGs市民社会ネットワーク専務理事の稲場雅紀さんに解説いただきました。

PHJ Q1

17のゴールと169のターゲット。SDGsのポイントとは？

稲場さん A1

大切なことは2つ。2030年までに貧困のない世界をつくること。そしてつづき世界をつくること。世界は放っておけば貧困が深まり、格差が広がるような仕組みになっていて、先進国の私たちは再生産できる資源の1.5倍を使いつづけています。SDGsは途上国だけでなく先進国の目標でもあります。



南部アフリカの山岳王国レントでLGBTのグループと

PHJ Q2

SDGsゴール3の中でUHCの達成が注目される理由とは？

稲場さん A2

UHCとは誰もが取り残されることなく、お金に左右されることなく保健サービスを受けられること。ここ20年程、保健のイニシアティブはエイズや結核、マラリアなど、特定の病気だけにフォーカスしていました。でも、病気ってこれだけじゃありませんよね。例えば中年の男性で、前立腺炎になってトイレが近くなって不快だ、という人がいるとします。ところが病院で「その病気、うちでは重要と思っていないので」と言われたら困りますよね。大切なのはどんなことであっても自分の健康問題にきちんと対応してもらえること。そしてサービスを受ける側のビジョンを大事にしよう、というのがUHCです。ですから、すべての人に健康と福祉をという包括したアプローチを重視したゴール3達成の要となります。

PHJ Q3

UHCで大事なことは？

稲場さん A3

UHCでとても大事なことは「ユニバーサル」ということ。たとえば言葉の通じない少数民族の人が診療所で横暴な扱いをされたとか。日本の場合だと、在留資格のない外国人が病院に行けないとか。PHJの活動でいうと、以前は母子保健分野が「女子供の問題だ」と言われ軽んじられていたとか。このように社会的に立場が難しい人たちに光を当てることに、希望を見出します。誰も取り残さないというSDGsの原則を考えながら取り組むことが大切だと思います。

PHJ

稲場さんの活動の原点は、横浜市にある日雇労働者の街、寿町での保健・医療支援。日本の「豊かさ」の影に多くの人が貧困や野宿を強いられる現実を経験したことが、今の活動に生きているとのこと。生活者や厳しい社会的立場に置かれた人という視点からUHCについて考えるきっかけとなりました。



## 支援企業訪問

# 医療は万国共通。

株式会社八神製作所

# YAGAMI

**明** 治4年の創業以来、医療機器の専門商社として医療、介護、保健にかかわる事業を営まれている(株)八神製作所。PHJの設立当初からの法人会員であると同時に、医療機器の寄贈や技術教育からはじまり、カンボジアの保健教育への支援など、特定の活動への支援を続けてくださっています。長年にわたるPHJへの支援に対する想いや、社会貢献活動についてのお考えを伺いました。

代表取締役会長 八神 徹 様



東北の植林活動



## 医療、福祉に関わっているからこそ社会貢献を

医療や介護・福祉に関わって商売をさせていただいて会社が成り立っていますので、社会貢献にも力を注いでいます。PHJはもちろんアフリカでの里親制度などを長年支援をしています。国内においても、阪神・淡路大震災や東日本大震災、最近で言えば熊本地震の災害が起きた時も医療機器の支援活動をしてきました。また、東日本大震災の際には、東北の松林を再生させるため「白砂青松再生の会」に参加して、従業員を含め私たち自身が現地に出向き植林活動を行ってきました。

## 医療には国境がない。

医療というのは万国共通のもので、国境はないと考えています。これからも発展途上国を中心に、医療の環境、技術が未だ十分ではない人たちに対して支援をしてきます。また、(株)八神製作所は、これまでモンゴル及びPHJの活動地でもあるミャンマーにおいても日本の医療支援チームに参画し、高度な医療技術のトレーニングに立会い、医療機器のアドバイザーとしてサポートにあたり医療協力に関わっています。



ミャンマーでの高度医療トレーニング

## 医療の基本となる活動の継続を

日本では高度化した医療技術を海外へ輸出する取り組みが進んでいますが、PHJのような地道な草の根活動があってこそ、高度な医療は活きていきます。農村地域における保健教育などの医療の基本となる活動を地道に継続することが、医療、保健支援事業で最も大切な事だと思います。

— 病院などの箱ものをつくるだけでは意味がなく、その中で生きる人材の教育が大切と、PHJの活動を評価して下さった八神会長。医療ビジネスに長く携わっていらっしゃるからこそその言葉だと感じました。

# PHJの輪

PHJ Circle



## チャリティカレンダー裏話

毎年チャリティカレンダーに使っているカンボジアの絵画は横河電機OBが結成したオークン会が建設支援したカンボジアの小学校(横河60会小学校)の生徒の皆さんによるものです。オークン会の皆様は毎年横河60会小学校を訪問し、子供達に楽しんでもらうためのイベントを開催されています。今年1月の訪問がなんと15回目とのこと。カンボジアの小学校への想いを同会的小木曾様に伺いました。

今年の横河60会小学校訪問でお会いした8人の先生のうち5人が60会小学校の卒業生でした。びっくりしたのは同時に大変嬉しかったです。訪問の当初は子供達はみな裸足で外国人に対する不安があり、我々に近寄って来ませんでした。また中学に行ける子は一人か2人でした。最近是我々がバスで到



運動会を子供達と楽しむ小木曾様

着すると、2列に並び日の丸の旗を持って「こんにちは」「ありがとう」と笑顔で迎えてくれます。訪問の初日は日本から駄菓子のお土産と現地調達したシャツとノート2〜4冊を全員に渡します。その後、カレンダーの絵に採用された4人前に出て来てもらい、カレンダー、クレヨン、画用紙、チョコレートを渡します。その後1年生から4年生を帰宅させたら、5、6年生にテーマ毎のグループに分かれてもらい絵を描いてもらいます。2日目は200食のカレーを大きな鍋2個で作ります。午後は運動会。徒競走、玉入れ、綱引きをすると、子供達が盛り上がります。私は高齢になりましたが、子供達の笑顔と目の輝きに元気を貰っています。オークン。クメール語でありがとうです。(小木曾 裕)

Hello!  
こんにちは!

PHJ STAFF

## PHJ 東京事務所

インターン生  
東京大学2年 茅根里紗  
ちのね  
茅根里紗



## 新しいスタッフから一言

今年の3月からPHJでインターンをさせていただいています。私は昨年の夏にインドネシアに行き、その後大学で国際協力について勉強したことからこの分野に興味を持ち、実際に国際協力に従事する具体的なイメージがほしいと思いインターンを始めました。広報のお仕事はとても楽しく、自分が書いたものを通じて支援者の方々がPHJの活動を知ることになりがいを感じます。さらにスタッフの皆さんとお話する中で自分の将来についてたくさんの刺激をいただいています。より多くの方にPHJに興味を持っていただけるよう頑張っていきますので、よろしく願います。

## PHJカンボジア事務所

プログラムマネージャー  
宮崎あすか



## 新しいスタッフから一言

2018年5月に入職しました。以前は、助産師として、お産の介助や妊婦健診などを行い、お母さんと赤ちゃんのケアや指導をしてきました。その頃から、公衆衛生の母子保健に特に興味を持ち始め、大学院で公衆衛生を専攻し、カンボジアのPHJの活動地の一つでもある農村地にて子どもの低栄養に関する研究を行っていました。このことをきっかけに、PHJの活動を知り、興味を持ちました。まだまだ未熟なのですが、一日も早く仕事を覚え、地域のみなさんと一緒にカンボジアのお母さんと子どもの健康に貢献できるように頑張りたいと思います。

## PHJのお知らせ掲示板

### カンボジア安全なお産応援募金のご報告

2017年2月より開始しましたカンボジア安全なお産応援募金は、2018年3月31日に終了いたしました。  
集まった募金額は627,301円となりました。ご支援いただいた皆様ありがとうございました。  
なお、保健センターで配布予定だった900個の奨励ギフトは、現地の保健センター側の事情により約720個となり、当初予定していた資金より低い金額で配布可能と

なったため、今回の募金を終了いたしました。  
今回の奨励ギフトの配布により、配布開始前の妊婦健診数が3保健センター1か月あたり253件(2016年11月)だったのに比べ、配布開始後では多い月には390件以上にものぼりました。  
このキャンペーンをきっかけに多くの方が今後も妊婦健診、産後検診を受けるようになることを願っています。



妊婦健診の様子



産後検診に来た母子にギフトを贈呈

### PHJ 東京事務所を移転しました。

2018年5月10日よりPHJ東京事務所を横河電機株式会社診療センター2Fに移転しました。移転後の連絡先は変更ありません。電話番号は0422-52-5507、送付物の送り先住所は〒180-8750 東京都武蔵野市中町2-9-32です。



## 編集後記

SDGsは聞いたことがあっても、UHCは知らないという方は多いかと思います。今号で少しでも理解を深め、PHJが携わっている「誰もが健康でいられるための環境づくり」に共感していただければと思います。